

この国の中心地、獏花（ばくか）

その街の地下には月光町という高級歓楽街がある。

スラムで這いつくばるように生きてきた私にとって、そこは一生縁のない煌びやかな別世界のはずだった。

「すげえいい仕事があるんだ。お前もこれで楽になれるぞ」

唯一の肉親であるクズ兄の言葉をなぜ信じてしまったのか。

長年のひもじい生活で、まともな思考回路が麻痺していたのかも
しれない。

連れて来られたのは違法カジノに隠された豪華なプールーム。

扉が開いた瞬間、甘ったるい香水の香りが鼻腔をねっとりくす
ぐる。

テーブルの上には、高そうなボトルとグラス、それから見慣れな
い色の錠剤。

それが何なのか、本能的に考えたくなくて、視線をそらした。

「あはつ、いらつしやい小鳥ちゃん。君ね、お兄ちゃんに売られたんだよお〜♪」

部屋の中央には気だるげに煙草をふかしながら、ルーレット盤の前に座る男がいた。

仕立ての良い漆黒のシャツを完璧に着こなし、切れ長の目を細めて笑う。

開いた胸元から首筋にかけて覗く特徴的な龍のタトゥーが、裏社会の人間であることを如実に表していた。

「なに、どういう事……」

状況が飲み込めず後ずさると、目の前で男は鼻歌交じりに分厚い札束を床へ放り投げた。

「ほら、お駄賃。もう二度とこの子の前に姿を見せないでね？　次来たら、お前を殺して豚の餌にしちゃうからさあ♪」

バタン、と扉が閉まる音がやけに大きく響く。

さっきまで一緒にいた兄の気配が跡形もなく消え、残されたのは絶対的な支配者と、逃げ場を失った私だけ――。

「かわいそうにねえ、今日から君は俺の可愛いお人形さんだよ♪」

コツ、コツと革靴の音が響き、男がゆっくりと距離を詰めてくる。逃げ出そうとした体は、背後にあった壁にあっけなく阻まれた。

長い指が伸びてきて、震える顎を強引にすくい上げると、煙草の匂いと、大人の男のむせ返るような色気が漂ってくる。

「俺は山華会のウェイ。それが、これから君を飼うご主人様の名前。一応、こんなんだけどこのボスやってます。これからのことは

心配しないで、俺がぜくくンぶ面倒見てあげるから、安心して堕ちておいで♡」

そう言い切ると抗う間もなく、甘く危険な匂いのする男の唇がちゅっ♡と重なる。

「んっ……、ふ、あ……っ♡」

ん、ちゅ……っ♡ちゅるるっ♡じゅるる……♡

有無を言わさぬ強引な舌が、口腔のやわらかな頬肉を蹂躪し、唾液が絡み合う卑猥な水音が、静かな部屋に反響した。

逃げようにも首筋をがっちりとホルルドされ、息継ぎすら許されない。

彼の甘い毒が唾液とともに注ぎ込まれ、肺の奥まで侵食してくる。抵抗する力は奪われ、ソファァーに押し倒されると、着古してボロ

ボロになった服はあつという間に剥ぎ取られた。

「怯えなくていいよ♡俺と一緒にいっぱいきもちいいことするだけだからさ♡ちゃんと教えてあげる♪」

ウェイの指が、私の太ももを撫で上げ、股下の無防備な中心へと滑り込む。

「ひっ……！ や、やめて……！」

「えーヤダー♡だってここは、もうこんなに濡れてるじゃん？ 無理やりキスされてるのに体はすっごく正直だね」 無

ひんやりとした指が、入り口からダラダラ♡と溢れ出した蜜を掬い取り、そのままヒクヒク♡と蠢くクリトリスをピンポイントでこりゅ♡と弾き飛ばした。

「ああっ!？ あ、んんっ……!♡」

電流が走ったような鋭い快感が、脳髓にじわり♡と染み渡る。

「あはっ、いい声。もっと鳴いてよ、小鳥ちゃん」

指先は容赦なく、けれどひたすらに甘く、敏感に充血したクリ豆をクニユクニユ♡とこね回す。

ぬちゅ……♡ぐちゅ……♡っ♡じゅぷぷ……♡♡

「ほら、こっちも寂しがってるよ」

中指と人差し指が、蜜で滑りの良くなった膣口をぬるり♡と割り開き、狭いナカへと侵入してくる。

冷たかったはずの彼の指先は、とめどなく溢れる蜜とホカホカ♡とした膣内によってすぐにねっとり♡とした熱を帯びた。

「ひぐっ！ やっ、そこっ、ああっ……♡」

親指の腹が、ぷっくり♡と膨れ上がった陰核を円を描くようにスリ♡しながら、ぐにゅっ♡と押し潰してくる。

くちゅっ……♡にゅるっ……♡こりゅりゅっ……♡♡
逃げようと腰を浮かせても、もう片方の手が骨盤をがちり押さえつけて、快楽から逃がしてくれない。

「だーめ♡俺の指をしっかりおまんこで味わって？」

囁きながら今度は二本の指で花豆をきゅっと摘み上げ、軽く引く張った。

「ああ~~~~っ♡ いやあっ、ひ、いいっ！」

ぷにゅっ……♡　じゅぷぷぷ……♡　じゅぱあ~~~~~

直接的な刺激に、足の指先が勝手に丸まり絶頂する。
スラムで生き抜くために張り詰めていた緊張の糸が、彼が与える
暴力的な快樂にあっけなく解かされていく。

「あはっ、クリちゃんすっごく硬くなってるし、ナカも俺の指ギュー
ギュー締め付けてるよ？俺に可愛がられるのそんなに気持ちいい？」
と動かしつつ、指の先でコリコリ♡とクリを弄ぶ。

「ひゃああっ！　や、やめてっ、こわれるっ！」
「あ~~~~♡可愛いね♡壊れちゃうの？そっか♡」

快樂に溺れる姿を見て、ウェイは恍惚とした表情を浮かべながら、

おまんこをいじめ続ける。

嘲るような、それでいて甘い視線に晒され、強烈な快感がビリリ♡と腰髄を激しく駆け上がる。

許しを乞うように首を振るのに、体は勝手に手のひらへとすり寄り、もっと強い刺激を求めて、たらたら♡と恥ずかしいほど蜜が溢れさせる。

それに応えるように指の動きが急激に速まり、ぐちよぐちよ♡と激しくナカをかき混ぜられた。

「あ、あぁ♡ だめ……また、いくつ……いっちゃううつ……♡」
「いいよ、俺の指で思いつきりイっちゃえ♪」

こりゅ、こりゅりゅっ♡ じゅわぁっ……♡ じゅぱぁ……♡

「よしよし、いい子だねえ。でも、まだまだこれからだよ？」

愛液を噴き出し、最初の絶頂を迎えた身体は休む間もなく、両脚を大きく開かされ、その端正な顔を濡れた秘裂へ深く埋めた。

「う、そ……そんなとこ、汚い、からっ！」

「全然汚くないよ。俺の小鳥ちゃんの蜜、すっごく甘くて美味しいから……んっ、ちゆる♡」

熱い舌が、びくびくと脈打つ柔肉を直接舐め上げる。

べろべろ……♡れろお……♡じゆるるるっ……♡

「ひぐっ！ あ、あああ……っ！♡」

指よりもさらに生々しく、艶めかしく動く舌での口淫。

ザラついた舌の表面が、ヒクつく膣口の周りにこびりついた愛液を逃さず絡め取っていく。

「んっ……♡ちゅ、じゅるる……ああ、小鳥ちゃんの匂いがする♡♡
もっと奥まで味見させてよ」

貪るようにずずず……♡と吸い上げられ、襷の隅々までねっとり♡と味わい尽くされる。

彼の上品な黒髪が私の股間に触れ、まるで飢えた獣のように私のおまんこを貪り喰らう姿にぞくり♡と興奮してしまう。

ずるる……♡　じゅちゅっ♡　ずちゅくくくく♡

「だめ、だめえっ！　また、おかしくなっちゃううっ！」
「いいんだよ、もっとおかしくなっても……俺だけを感じて、俺なしじゃ生きられない体になっちゃえ♪」

甘い囁きとともに、ウェイはぷっくりと膨れ上がったクリトリスを唇で挟み込み、息が詰まるほど強い力でじゅううっ♡と吸い上げた。

「あっ！？ ひ、いいっ！ やあっ♡♡」

限界を超えた刺激に、下腹部の奥がきゅんと痛いほど激しく収縮した。

「あああっ~~~~~~~~♡♡」

ぷしゅっ……♡ぶしゅ……♡びしゃしゃしゃしゃ~~~~
♡♡♡

目の前が激しく明滅し、弾け飛ぶような絶頂とともに、秘裂の奥から透明で甘い潮が勢いよく噴き出した。

淫らな汁の飛沫が、顔を埋めていたウェイの頬から顎にかけて容赦なく降り注ぐ。

「はあつ、はあつ……あつ——」

マフィアのボスの顔を自分のいやらしい液で、ぐっしより♡濡らしてしまった。

取り返しのつかないことをした恐怖と羞恥に、さあつ——と血の気が引いていく。

けれど、ゆっくりと顔を上げたウエイは怒るところか、自身の頬を濡らした潮を長い指でなぞり、それをぺろり♡と舐め取った。

「あはっ♡ 俺の顔にお汁ひっかけちゃったね♡舐められただけでこんなに潮吹きちゃうなんて……ほんとに小鳥ちゃんはえっちなだけねえ♡」

「う、あ……あ……」

「顔がりんごみたいに真っ赤になっちゃって……あゝたべちゃいたいなあ♡」

息絶え絶えに幾度目かの絶頂を迎え、ガクガクと痙攣する腰を、ウェイの両手が優しく包み込んだ。

「ここもすっかりトロトロになっちゃったね♡でも、俺ばっかり気持ちよくさせてあげるのも不公平だよね♪」

甘く囁きながら立ち上がりガチャリ、と音をたててベルトを外し自身のスラックスを解く。

あらわになったのは、暴力的なまでに怒張した肉棒。

抗う間もなくソファアの前のラグにひざまずかされ、有無を言わさぬ微笑みを浮かべる。

「ほら、お口を開けて？　俺の顔汚したお詫びに……綺麗にしてよ」

震える唇をそつと開くと、ウェイの大きな手のひらが後頭部を優しくホールドする。

開かされた口内には、巨大な魔羅がずるりと侵入し、熱を帯びた亀頭の先端が舌に触れた瞬間、ビクッ♡と肩が跳ねた。

「んっ!?! ふ、ぐっ……!」

「そう、上手。舌を出して、キャンディーを舐めるみたいにペロペロ♡してみて?」

息苦しさ、今まで嗅いだことのない濃密な男の匂い。

嫌なのに、嫌なはずなのに、さっきのクンニで狂わされた体は、彼の色気に当てられ下腹部の奥をじんじん♡と疼く。

顔を背けようとも思ったが命令に逆らえず、おずおずと舌を這わせ、透明な雫を舐めとった。

ちゅっ……♡れろおっ♡れろ、れろれろ♡

「あはっ、いい子。小鳥ちゃんのお口の中、すっごくあったかくて気持ちいい♡でも、もっと奥まで咥え込めるよね?」

んっ♡……ちゅ、じゅるるっ♡ちゅぱっ……♡じゅぷっ……♡

不器用な舌使いを褒められるたび不思議と胸が甘く締め付けられる。

冷徹なマフィアのボスが、今は蕩けた声で私の奉仕を喜んでいる。その背徳感と、頭を撫でてくれる手のひらの優しさが、私の理性をじわじわと溶かしていく。

「んっ……さいっこう♡えらいねえ……♡でも、もうおまんこがピクピク♡しながら寂しがってるっ……♡かまってほしいのかな♪」

私の口を塞いだまま、ウェイは自分の足の親指を器用に使ってツンツン♡と花芯を刺激した。

「んぐっ!?! んんんっ!」

ぬちゅ♡　ぐちゅちゅ♡

フェラチオを強要されながらも、足の指でコンコン♡と一定のリズムで秘豆を叩かれる。

同時に与えられる刺激に、脳髓が白く弾け飛びそうになる。
トン♡トン、トン♡……トン、トン♡

「ふぁっ!？　は、ああぁっ!♡」

敏感な真珠を指先で弾かれ、口から熱い楔がポン♡と抜け落ちた。

だらしなく銀の糸を引く唇から、甲高い喘ぎ声が漏れる。

「あーあ、抜けちゃった……だめだよ、俺がいいって言うまでちゃんと啜えてないと♡」

甘くたしなめるような声とともに、後頭部を包んでいた大きな手のひらにぐつと力を込められ、再び口内に、怒張しきった巨大な肉棒がずぶり♡と奥まで押し込まれる。

「んぐっ!？ おえっ……ふ、あっ♡ぐっ……」

喉の奥の柔らかい粘膜を直接突き上げられて息苦しいのに、蜜口を弄る足の指の動きはさらに激しさを増していき苦しいのか、気持ちいいのか、わからなくなってくる。

こりゆりゆっ……♡ぬちゆちゆっ……♡ぐりゆっ……♡

「……んっ♡あ、あ、ああっ……♡♡」

猛った肉棒で呼吸を奪われ、まともな声すら出せない。

膣口は足の指でくちゆくちゅ♡と屈辱的な方法で弄られ限界まで快感を引き上げられる。

逃げ場のない圧倒的な支配に、脳髓がトロトロに溶けていく。

「はああつ……すごい。苦しいはずなのに、さっきからお口のナカできゅーっ♡て俺のこと締め付けてる。……小鳥ちゃんは本当にいやらしいねえ♡」

じゅるるるっ♡　ちゅぱあっ♡　ごちゅっ♡

「んぐ、んぐぐうっ~~~~♡♡」

足の指で無慈悲に花蕾を弾き飛ばされ、閃光のような絶頂が全身を貫いた。

ガクガクと背中を反らせて震える体を、ウェイの手が逃がさないようにがちりとホールドする。

「ああつ……！　俺も、もう限界っ。出すよ……小鳥ちゃん、俺の全

部、残さず飲んで？」

喉奥までずどんっ♡と突き入れた状態で、ウェイの体が大きく跳ねた。

びゆるっ……♡びりゅるるる♡どぴゅるるる♡どくんっ、どくんっ♡

「んぐうつ！？ ん、ぐ、ちゅ……っ♡」

ドロリ♡とした白い体液が喉仏まで勢い良くぶちまけられる。

口のなかから溢れ出たそれはっ……♡と口角からこぼれ落ちていく。

「あゝあ。ダメでしょう？こぼしたら……ちゃんと全部のみこんでね♪」

後頭部を押さえられたまま、喉まんこに絶え間なく注ぎ込まれる白濁を、本能のままにぐくり、ぐくり♡と飲み下していく。

ごきゅっ……♡こくっ♡とろおっ……♡どぼぼ……♡むせ返るほどの濃密な雄の匂いと、生臭くも甘い精液の味が、食道を通して胃の腑まで落ちていく。

（おかしい……不味いの……）

それでも、喉奥まで支配される感覚は、嫌悪よりも破滅的な快感に近かった。

ようやくウェイがゆっくりと腰を退くと、唇から銀の糸と白い体液がだらしなく垂れ、涙目で咳き込む口元を、ウェイの親指が優しく拭う。

「はあ……ちゃんと飲めてえらいねえ♡ちよっ♡えらっ♡い♡」

「げほっ、んっ……はあっ……」

まだ白濁がついた唇を褒めるように優しいバードキスをちゅっ、ちゅっ♡と繰り返す。

「んっ♡頑張ったね♡でも、フェラも気持ち良かったけど、本番はこれからだよね？」

蕩けた笑顔を浮かべたマフィアのボスは、欲望満ちた瞳で、ただ蜜を溢れさせている下半身を見下ろした。

「次は、おまんこを俺のこれでたっぷり可愛がってあげるからねえ」
♪

ウェイの強靱な腕が私の体をラグの上から軽々と抱き上げた。
そのままソファ一へと仰向けに寝かされ、両脚を大きくM字にな

るように股を開かされる。

屈辱的な体勢にさせられ軽く睨みつけるが、彼はずっと目を細め、嬉しそうにニヤニヤしながら身体を舐め回すように見つめる。

「んふふっ♡お股広げられて恥ずかしくなっちゃったの？かわいいね♡」

そう言いながら凶悪なまでに怒張した熱い楔をたっぷりと蜜を吐き出している私の膣口へとあてがった。

「ひっ………！　そんなの、むりっ、ぜったい、はいんないっ………こわいよお………」

ぽやっとした頭でこれからのことを想像し、つい涙がこぼれた。するとぎゅっと抱きしめられ、上目遣いでこちらを見つめ、なだめてきた。

「あゝ泣かないで……怖くないよおゝさつきまでお口で俺のこと可愛がってくれたでしょ？だから大丈夫だよ♡」

よしよしと頭を撫でられ、ちゅ♡ちゅ♡と甘やかすようなキスを送ってきた。

「でも……初めてだし……♡さつきは、ウェイがいきなりくち、いっぱい……♡くるし、かった……」

頭が回らないせいでつい、子どもみたいな言い方をしてしまう。

「そうだね♡でも嫌じゃなかったでしょ？じゃあ……辛くないようにお薬、飲もうね♪そしたらもっと気持ち良いよ♡」

ウェイはテーブルに置いてあった袋から怪しいピンク色の小さな

錠剤を取り出し、自身の口に放り込むと、そのまま私の唇を深く塞ぎ込んだ。

「んぐっ!？ んんっ、ふ、あっ!」
「んっ……♡ほら、ちゃんと……ごくんってして?」

口移しで無理やり舌の奥へ押し込まれ、ごきゅっ♡と飲み込まされる。

すぐにクスリは効き始め、心臓の鼓動がどくん、どくんとやけに大きく聞こえ始める。

全身の血が沸騰したように熱くなり、視界はぐらり♡と歪んだ。

「はあっ、はあっ……あ、ついっ、からだ、おかしいっ♡」

（嫌だ……っ。スラムでどれだけ惨めでも、身体だけは誰にも売らなかったのに……っ私を金で買ったような男に、支配されたくない）

そう思うのに薬でドロドロに溶かされた体は、ささやかな矜持すらあっけなく裏切っていく。

目の前の圧倒的な強者に貫かれることを本能から渴望し、下腹部の奥がきゅんきゅん♡と卑猥に疼いて甘い蜜を零してしまう。

「あはっ、もう効いてきた。すっごいびしょびしょだねえ。ほら……俺の、ぜーんぶ受け入れて？」

甘い囁きと共に、ずぶりと硬い先端が狭い膣ナカをこじ開けにかかる。

「ああっ！ いたいっ、いたいっ！」

「んっ♡ごめんね……これからいっぱい気持ち良くしてあげるからね♪がんばれ♡がんばれ♡」

ずぶうつ……♡ぶちっ……♡ずぶぷ……♡
ずきり……と薄い膜が破れる鋭い痛み。

内臓の形が変わるほどの巨大な肉棒が、未開の柔肉を一気に押し退け、最奥まで容赦なく到達した。

「~~~~づー!! あ、あ、があっ……!!」

「はああっ……最高♡あったかくてきつくって、俺のこと包み込みながらすっごい締め付けてくる……っ」

引き裂かれたような痛みと痺れるような快楽に声にならない悲鳴を上げる。

その瞬間、ウェイが体を屈め、露わになっていた桜色の頂きをぱくりと口に含んだ。

ちゅぱあっ……♡じゅるるるっ……♡れろお……♡♡

「ひぐつ、あ……ああっ!? あ、あ、んんっ♡♡」

強い力で乳首を吸い上げられ、ザラついた舌で執拗に舐め回される。

ひりひり♡と膣が悲鳴を上げているはずなのに、媚薬で異常なまでに過敏になった体は、その痛みすらも狂おしいほどの快樂へと変えてしまった。

「あはっ♡ まだ痛い？でも……痛いのを上回るくらい、すっごく気持ちいいでしょ？」
「あ、あっ……！んっ♡……あんっ、あああっ♡♡」

痛かったのは最初だけでそのあとは甘い快感しかなく、膣襞はピクピク♡と震える。

おっぱいをむにゅむにゅ♡と揉みしだいたり、先端をピンピン♡と爪で弾いたりしながら、腰をゆっくりと動かし快感をじんわり広げていった。

引き抜かれるたびに、奥褌が吸盤のように絡みつき、抜けていく肉竿を必死に引き留めようとする。

しかしウエイはわざと焦らすように、根元までゆっくりと時間をかけて引き抜き、そして再び、ゆっくりと子宮口まで沈め込んでくる。

「ああっ……♡んっ、あ、ああっ……♡」

「あはっ、すごい♡ナカでぎゅうぎゅう♡って俺のこと可愛がってくれて嬉しいな♡小鳥ちゃんも気持ちいいねえ♡」

ぬちゅ……♡ぐちゅちゅっ……♡じゅわあ……♡♡

媚薬で極限までトロトロ♡になった柔肉は、ほんの少しの摩擦すら致死量の快楽へと変換してしまう。

凶悪な楔がビラビラの一つ一つを丁寧に押し広げ、撫で上げるようにねっとり♡と擦っていく生々しい感覚に、脳髓が甘く痺れていく。

「もつと……っ♡あっん……♡はやく……動かしてえっ……♡」
「早く？　だあゝめ♡せっかく俺のモノになったんだから、初夜な
んだし隅々までじっくり味わわせてよ」

腰をゆっくりと動かしながら、ウェイの指先がぷっくり♡と充血
したクリをぐにゅっ♡と押し潰した。

「ひぐっ！？　ああっ……♡やつ、そこっ、だめえっ♡♡」
「だめじゃないでしょ？　ほら、クリちゃんも、もっと欲しがって自
分からヒクヒク動いてるよお♪」

ずちゅんっ……♡　ごちゅっ……♡

動きは早くないのに、的確に一番弱いところを抉られる。

激しく突き上げられれば一気に絶頂を迎えられるのに、寸前で止
められるような生殺し状態。

じりじりと焦らされる快感に耐えきれず、勝手に腰が浮き上がり、彼の熱を求めてすり寄ってしまう。

「ああっ♡おねがい、ウェイっ……もっと、おくっ、激しくしてえっ……♡」

「あはっ♡おねだり上手だねえ。最初は怖がってたのに、すっかり俺のおちんちん大好きになっちゃったね♡そんなに欲しいならもっといっぱい激しく突いてあげる♪」

そこからゆったりとしたリズムが一気に暴力的なピストンへと変化した。

ぱんっ！ぱんっ！ぱんっ！ごちゅっ……♡ ずぱんっ……♡ ずぷぷっ……♡

「ああああっ！？んあっ♡すごっ、おく、くるのおっ♡♡」
「はああ……さいっ、こう♡あったかくて、もう、たままない……」

容赦のない腰振りはポルチオを激しく突き、スローセックスで極限まで焦らされていた体は、堰を切ったように激しい快楽の波に飲み込まれる。

「あ、あつ、いくつ！ わたし、いっちゃううっ♡♡」
「オレも……っ！ いっしょにイこうね、小鳥ちゃんっ！」

ずちゅんっ！と膨張した肉棒を打ち込まれた瞬間、ウェイの動きはぴたりと止まり、ビクンッと大きく跳ねた。

それと同時にわたしにもビリリ♡と甘い衝撃が走り、絶頂した。

どくんっ、どくんっ♡びゅるるるるる……♡ドピュルルル……♡とぷんっ……♡どびゅるるるるる……♡

未開の子宮の奥まで、沸騰した白濁が勢いよく、何度も何度も注

ぎ込まれる。

初めて男を受け入れたお腹の中が精液でたっぷりと満たされていく生々しい感覚。

「あ……あああ……♡♡」

「……っん♡……はあ……はあ……っ♡……小鳥ちゃんが可愛いからいっぱいでちゃった……♡」

ずるるる……♡

蜜壺を栓のように塞いでいた楔が引き抜かれた。

ぽっかりと穴が空いてしまい、そこからどぼぽ……と体液が流れ出す。

「はあ……えっろ♡俺のザーメンが小鳥ちゃんのナカにいるの最高♡♡」

じつと膣口を見つめてくるなと思ったら溢れでしまった白濁を指で搦い、塗りたくりはじめた。

「ちゃんと受け止めなきゃだめっていったでしょ？」

そう言うと言で蓋をするように挿入し、ニユプニユプ♡と弄り倒される。

「んあ♡……はあ♡」

まだ絶頂の余韻を残す身体は素直に快感を受け取ってしまう。

「あは。俺はちゃんと漏れないように蓋してあげてるだけなのに気持ちよくなっちゃったの？エッチな子だなあ♡」

「んっ、な。じゃあ、やめてよう……♡」

「えゝホントに？こんなに奥の壁をびくびくしながら俺のこと誘っ

てるくせに♡」

意地の悪い笑顔で囁きながら、ウェイは蜜壺に入れられていた指をずぼん……と乱暴に引き抜いた。

「あつ、あぁつ……♡やつ、ぬかないでえつ♡」

中途半端にイジられてしまったせいでもどかしくて堪らない。

「あゝあ……せっかく言うこと聞いてあげたのに……嘘つきだね小鳥ちゃんは」

「……っん♡ごめんな、さい」

筋張った手のひらで頭をよしよしと撫でられる。

「もう、しょうがないなぁ♡初めてだし許してあげる♪じゃあ、も

う一回やろうか♡まだまだたりないんでしよう？」

さっき吐精したばかりなのに、まったく萎えずに勃起している肉棒の先端を膣口に押し当てられる。

「ひっ……！ うそっ、まだ、そんなに……っ」

「俺をエッチな身体で誘惑してくるのがいけないんだよ……それに気持ちいいのは大好きでしょ？」

ずちゅううっ……♡ぬちゃああっ♡

「あ、あ、があっ！？ ああああっ♡♡」

ぽっかりと空いていたおまんこにずちゅん♡と簡単に奥に肉竿が入り込んだ。

トロトロ♡にほぐされた柔肉はきゅうきゅう♡と嬉しそうに締め

付ける。

「ああああっ!?! ひいつ、あああっ♡♡
「んっ……♡ ナカ、すっごい熱い……っ! さっきより俺の精液
を搾り取ろうとしてるんじゃないっ♡」

ぱんっ! ぱんっ! ごちゅっ……♡ ぐちゅちゅっ♡
媚薬のせいなのか、ウェイの性技のせいなのか、もう快楽に溺れ
ることしかできなかった。

ごちゅごちゅん♡とポルチオを押し潰すように突かれるたびに、目
の前がチカチカと光り、絶頂が何度も何度も押し寄せてくる。

「ああ~~~~、イクっ♡あああっ……♡
「……んっ♡いいよ♪」

ずぱんっ!ごちゅっ……♡ぬちゃああ……♡じゅぷぷっ……♡

甘い衝撃は全身に広がり、蕩けた媚肉はブルルッ……と震え猛った肉棒を刺激する。

「あ、ひいっ……♡ おが、しくなるっ、わたし、こわれちゃうよう♡♡」

「怖くないからねえ♡俺がずっと抱きしめててあげるから……」

ずちゅんっ!!

一番深いところを抉るように突き入れたまま、ウェイの腰がびくんっ、びくんっ♡と大きく跳ねた。

どくんっ、どくんっ♡ とぷんっ……♡ びゆるるっ♡

「ああああっ……っ、~~~~っ♡♡」

すでに満杯だったはずの奥底に、さらに濃い白濁がたっぷり注ぎ込まれる。

お腹の中がぱんぱんに膨れ上がり、彼の一部で完全に満たされていく。

「はああっ……♡ すっごい、またこんなに落ちちゃった……♡ ねえ小鳥ちゃん、最高だねえ……って、あれ？」

耳元で甘く囁く声が、遠くへ消えていく。

限界を超えた快楽の波に脳髓が完全に溶け切り、意識は真っ白な光の中へ落ちていく。

「あはっ……気絶しちゃった。ほんと、可愛いなあ……おやすみ小鳥ちゃん♪」

意識が途切れる瞬間、汗ばんだ前髪を優しく撫でる手のひらの感触と、ウェイの吐息だけが聞こえた。

ウェイ視点

情事で疲れ果てすうすうと可愛い寝息を立てている彼女の頬を、そつと指先で撫でた。

泣いたせいで赤く腫れた目元すらも、自分のせいでこうなったんだと思うと、愛おしくて堪らない。

「ああ……ほんとつ……に、かわいい。まじ、天使。もう、食べちゃいたいくらい大好き……♡」

何度抱きしめても、足りない。

いっそのこと君のすべてを飲み込んでしまいたい。

彼女にとって俺はいい男ではないだろう。

だけど今更手放したりするもんか……

俺の気持ちは君と出会ったあの日からずっと変わらない。

「愛してるよ……小鳥ちゃん」

小鳥ちゃんと初めて出会ったのはまだ俺が組織に入ってたばかりの頃だった。

幹部の使いっぱしりとして、スラムの路地を駆けずり回っていた。今思えば、あの幹部は俺の面倒を見る気などさらさらなく、体の良い小間使いとしてこき使っていただけだった。

「けっ……何のために組織に入ったんだか……」

生きるために組織に入ったのに、メシの面倒すら見てもらえず、辞めるにも一度入ってしまったえば抜けるのは不可能だった。

「あゝ腹減った……」

路地裏にへたり込んでいると目の前に、突然小さな影が現れた。

「……おにいちちゃん、お腹空いてるの？」

薄汚れた格好の痩せ細った女の子だった。

この少女だつてろくに食べていないはずなのに、饅頭（マントウ）を半分に割って差し出してきた。

「あげる。わたし、あんまりお腹空いてないから」

どう考えても嘘だろう。差し出してきた手は微かに震えていたし、その瞬間ぐうぐうと可愛らしい腹の音が鳴った。

「あつ……と、私も半分あるから！一緒に食べよ」

誤魔化すように、見知らぬ俺へ無邪気に笑いかけていた。

スラムで生き抜くためには、誰かに与える余裕なんてない。俺だって、そうやって生きてきた。なのに、この子は――。

「……ありがとう」

「いいよこの饅頭ね。安くて美味しいんだよ！たまにね運がいいと具が入ってるんだあ」

受け取った半分の饅頭は、具なんて欠片も入っていない、ただの固くてパサパサの安物だった。

「あつもうこんな時間……早く帰らないとお兄ちゃんに怒られちゃう……じゃあね！」

慌ただしく帰って行った後ろ姿が、この腐った世界の中で、一人だけ輝いているように見えた。

そうだ、彼女は女神なんだ。そうに違いない。

その日から俺の好物は饅頭になり、彼女の事が片時も忘れられなくなった。

いつかあの子を見つけ出して守るため、俺は死に物狂いで組織内をのし上がった。

そのおかげで先代の指名を受け、ついにはボスの座にまで就いた。もちろん、あの頃俺を使い潰していた幹部はぶっ殺してやった。

それでもあの少女の名前も住んでいる場所も、年齢さえわからなかった俺は、トップに立つてからも彼女を見つけ出せずにはいた。

そんな悶々とした日々を送っていた時に奇跡が起きたのは、ほんの数週間前のことだ。

執務室にやってきた部下が、下卑た笑みを浮かべながら報告書を

差し出してきた。

「スラムの賭場で借金作ったカモ野郎が、妹をウチに売るって言うんですけど、どうします？　こういう時は安く女買えるんですよねえ。あ、品定め用にこっそり写真撮ってきたんで見ます？　痩せ過ぎですけど結構上玉じゃないっすか？」

クソみてえな話だなと思いつながら報告書についていた写真を見た瞬間、俺の心臓は激しく跳ねた。

少し大人びてはいたが、あの時俺に饅頭をくれた女神に違いなかった。

俺の想い人を品定めた挙句、上玉だのとはざく部下を絞め殺したい衝動に駆られたが、何も知らないコイツにそれはないだろうと自分を落ち着かせた。

「俺のところによこせ……俺が飼うから手はずは任せた」

「えっ……まじっすか……特定の女作らずふらふらしてるウェイさんが！えゝマジかあ……」

「ごたごた言っでないで仕事しろウーシエイ」

彼女を見つめ動揺しているのをでできる限り悟られないよう命じ、彼女を迎えるまでの間、すぐに身辺調査と監視を徹底させた。

だが、報告に上がってきたのはクソみたいな現実だった。

父親はそもそもおらず、母親にスラムで育てられていたが数年前に亡くなっていた。

唯一の肉親である兄はほとんど働きもせず彼女を脅し、金をせびっては賭け事に興じていた。

その上、雇われた先でも店主に体の関係を要求されていた。

拒否してからは何かにつけて給料を減らされたり、長時間働かされたり、執拗な嫌がらせを受けていた。

「クソつたれが……」

俺は怒りに震えたが、このクズどものお陰で彼女を都合よく手に入れたのも事実だった。

数日後、俺は高鳴る心臓の音を誤魔化すように、気だるげに煙草を吹かしながら違法カジノの＜Club＞で彼女を待っていた。扉が開き、あのクズな兄貴に連れられて、彼女が部屋に入ってくる。

擦り切れた粗末な服。栄養失調で落ち窪んだ頬と、怯えきつた瞳。それでも、目の前に立つ彼女は間違いなく俺の女神だった。

（やつと……見つけた、俺の女神……）

感動で涙が出そうだったが彼女が逃げようなんて考えないよう、ただ事実を告げ、彼女から兄を切り離すことにした。

『あはつ、いらっしやい小鳥ちゃん。君ね、お兄ちゃんに売られた

んだよお♪』

分厚い札束を床へ放り投げ、俺の宝物を地獄に突き落としたゴミクズを冷たく見下ろす。

『ほら、お駄賃。もう二度とこの子の前に姿を見せないでね？ 次来たら、お前を殺して豚の餌にしちゃうからさあ♪』

（安心してね、小鳥ちゃん。お前を泣かせた連中は、二度と君の前に現れないようにしてあげる。）

状況が飲み込めずに壁際まで後ずさる彼女へ、ゆっくりと歩み寄る。

（やつと女神が俺のものになってくれた……可哀想にね、こんな悪い男のモノに堕とされるなんて……）

そんな彼女は今、悪魔の手に引かれ、長い夜を終えて隣でシーツに包まりながら寝ている。

「俺が見つけられなかった間……誰にも頼れなくて、すっごく辛かったよね……でも、もう大丈夫だよ」

愛しい艶髪を撫でながら、仄暗い悦びが胸の奥で渦を巻く。

俺から逃げてても、結局は過労死するまで安い賃金で酷使されるか、娼婦になって性病で死ぬかのどっちかしかない。

それなら、ここにいたほうが絶対に幸せだ。

温かいご飯を食べて、柔らかなベッドで眠って、綺麗な服を着て、俺に大事にされていればいい。

ずっと贅沢をさせてあげられる。

君のことは絶対誰にも傷つけさせない。

賢い小鳥ちゃんなら、どっちを選ぶべきかすぐにわかるはずだ。
いや分からなくなつたって何度だつて教えてあげる。

俺以外に頼れるものなんて、何ひとつ残さない。
そうすれば小鳥ちゃんを、俺たちだけの世界へ引き込める。

「んっ……う……」

「おやすみ、可愛い俺のお姫様。これからもず……つと一緒だよ♡」

体中にキスを落とし、腕の中で無防備にまどろむ彼女を優しく抱きしめた。